

# ハワイ州における「子どもとする哲学（P4C）」実践動向にかんする研究報告——モデル校での取り組みを中心として

A Report of Philosophy for/with Children (P4C) Practices in the State of Hawai'i:  
In Terms of “p4c Hawai'i” at the Several Model Schools

堀越耀介（東京大学大学院教育学研究科博士後期課程・  
日本学術振興会特別研究員 DC2）

## 1 はじめに

本邦で、「子どもの哲学」や“P4C”といえ、あの毛糸のボール、「コミュニティ・ボール」や「知的安全性（Intellectual Safety）」の理念を想起する方が少なくないのではないだろうか。これは、ハワイ大学のトーマス・ジャクソン氏が発展させた非常に画期的な“p4c Hawai'i”の理論・実践として知られている。他方、こうした理論・実践は、世界的な P4C や哲学プラクティスの潮流から見れば少数派であることにも留意すべきであり、これをもって“P4C”とするのは早計で、世界各国の膨大な P4C 実践の潜在性だけでなく、実践を批判的に検討するための多様な理論的視座をも見過ごしかねない。

むしろ筆者自身は、コミュニティ・ボールを使用せず、ドイツで発展した「(ネオ)ソクラテック・ダイアログ」やフランスの「哲学カフェ」のスタイル、そしてアメリカにおけるマシュー・リップマンの P4C など様々な潮流が交じり合った「哲学対話」に親しんできた。こうした背景から、筆者は哲学プラクティスの研究を志す者として、自身の実践や理論を相対化すると同時に、むしろそれとは距離のある P4C を学ぼうと、2019 年 9 月より 2020 年 3 月まで、客員研究員として 6 か月間ハワイ大学に滞在している。

本研究プロジェクトにとって比重が大きいのは、ハワイ大学のアンバー・マカイアウ氏による、P4C の市民性教育及び社会正義教育への応用、そしてジョン・デューイの思想を強く受けて設立されたハナハウオリ小学校の見学である。もちろん、その過程で、本邦の P4C で影響力を持つ p4c Hawai'i の様々な理論や実践の研究も随時行っている。

とはいえ、この研究滞在は、p4c Hawai'i それ自体の研究というよりも、それがいかにしてハワイ・アメリカの学校に定着しているのか、どのような仕方で市民教育に応用されているのか、そしてジョン・デューイの思想がいかに P4C やハワイの学校で体现されているかを研究することに主眼を置いている。

他方で本報告は、P4C の特に実践面に関心のある一般読者に対して、本邦の実践者間で比較的好く知られている p4c Hawai'i の様子を平易な形で紹介できるよう努めつつ、一方では、以上のような問題意識・視点からも、現地のモデル校における実践を軸に報告する。ただ、紙幅の都合で、p4c Hawai'i の理論や用語については、大幅に説明を省略せざるを得ない。当該 HP には多くの資料が公開されているため、適宜参考にしていただきたい。

## 2 ワイキキ小学校

ワイキキ小は、ワイキキの南端に位置する公立学校で、2000年頃から p4c が行われてきた。この学校の特徴は、すべての学年で p4c が行われていることである。教師は、自身の教科や、単に「プレーン・バニラ」（教材があればそれを使い、問い出し・投票後、哲学探究するオーソドックスで、シンプルな p4c スタイル）の形式で、授業に取り入れている。

どのセッションも、基本的に自分の名前を言い、簡単なアイス・ブレイク＝質問に答えることから始められる。例えば、どの州に行ってみたいか、どんなスポーツや食べ物が好きかなどである。個々の質問自体は他愛もないことなのだが、簡単な質問だからこそ必ず冒頭に全員が発言できることで、一人一人がもれなくコミュニティの一員であることを自覚できる重要な契機になっている。また、ここで自分の答えにたいする理由を答えさせる場合もあり、p4c をする前段階のウォーミング・アップという役割も兼ねる。

こうしたウォーミング・アップに加えて、導入部で p4c のルールや目的、「グッドシンカーズ・ツールキット」の項目、つまり、p4c では何を大事にしているのかを生徒に尋ねる教師も多く、それが p4c の時間であること、そしてその目的を強く意識させることができている。中でも、「話の聞き方」に意識を向けさせる教師は、「目、耳、手、体、頭は、それぞれどうやって参加すべきですか」と質問し、「目は話している人を見て、体をそちらに向け、手は下」などと口々に生徒は答えるのだった。参加する、答える、だけでなく、聞くこと、コミュニティ、急がないこと、といった理念も子どもたち自身が内在化している。

選ばれる問いは、千差万別である。中・高学年のクラスでは「なぜ勉強しないといけないのか」、「善いことをするために、悪いことをしてもいいのか」、「よい友達ってどういう意味か」といったお馴染みの問いもあるが、低学年のクラスでは「もしすべてのものがキャンディになったらどうなるか」、「もし私たちがビデオゲームの中に閉じ込められたらどうなるだろうか」といった斬新な問いも多数であった。

とはいえ、当然だが、どの教師も p4c を最初から簡単にやってのけたわけではない。職員会議に参加させてもらった際、彼らはその困難を口々に語ってくれたが、同時にその非常にクリエイティブな解決法も教えてくれた。ある教師は“When Someone Deeply Listens to You”（Web で参照可）という詩を導入に使い、感情やイメージに訴える仕方で、傾聴を学ばせたという。また別の教師は、「知的安全性」が確保されているときと、そうでないときをあえてデモンストレーションしてみて、そうでないとき（全員がまったく自分のことを聞かず、だるそうにしているとき）どう感じるかを言語化させたという。教師の類まれな創意工夫でワイキキ小の p4c は成立してきたことが強く感じられた貴重な機会だった。

## 3 ワイマナロ小・中学校

ワイマナロ小・中学校は、オアフ島南東部にある自然豊かで、大変有名なビーチを有する地区にあり、主に現地の子どもたちの通う公立学校である。ワイキキ小やカイルア高校に比べれば p4c の実践自体は後発で、2013 年頃から取り入れられている。その意味では、それほど頻繁に p4c が実施されているわけではないものの、定期的なコミュニティ作りの一環として、学校の基幹的部分に p4c が位置付けられていることがこの学校の特徴である。

そういう意味で、この学校で p4c が行われることの意味はユニークだ。というのも、この学校には比較的落ち着いた生徒も少なくない。授業中に頻りに席を立ったり、授業がめんどろだと連呼する生徒もいる。そんな中、ハワイ大学のベンジャミン・ルーキー氏は、75分の持ち時間のうち、その半分以上をコミュニティの基盤づくりのゲームに使う。

前半は、グループ全員の名前を覚えて親密度を上げるため、互いの名前を呼んでボールを渡していき、全員にいきわたるまでの速さを競う「スピード・ボール」や、「フルーツ・バスケット」をおこなう。後半は、輪の中心に一人が座り、その人に向けて様々な質問を浴びせかけていく「ホット・シート」と呼ばれるゲームを行った。単に個人的なことだけでなく、「勉強をまったくしなくていいとしたら何をするか」といった質問を投げかけることもでき、このゲームは p4c の前段階的な役割を果たしているという側面もある。

残った僅かな時間で対話をするのだが、しばしば困難は続く。挙げられる問いには興味深いものもあるが、「なぜ今〔授業中に〕、外で遊べないのか」、「p4c は、どうしてこんなにつまらないのか」といった問いも平然と挙げられている。実際には、それ自体面白い問いでもあるのだが、どうも本人たちはそういうつもりで出しているようだった。とはいえベンジャミン氏は、彼はあの時には集中していたとか、彼女は前回と比べてこうだったという形で、長いコミュニティづくりのプロセスの一環としてポジティブに捉える。

こうしてワイマナロでは、“WE>I Day”と呼ばれる学校行事や、いくつかの日程に、学年混合でコミュニティ形成を目的とした p4c が行われている。またある日には、「いかに学校をよくすることができるか」というテーマのもと p4c が行われた。アイス・ブレイクとして「超能力があったら何をしたいか」とその理由を挙げ、ウォーミング・アップのための問いを考えるとところから始まった。「いじめが起きたとき、みんなで話し合うべきか、単に罰則を与えるだけでよいか」、「はじめから絆があって強力だが同質なコミュニティがいいか、それとも多様な人がおり自由に民主的な方がいいか」といった議論がなされた。

そののち、サッカーボールもコートもない地方に住む子どもたちが、自分たちのサッカーチームを作り上げていく実話を描いたショートビデオ“TMB Panyee FC Short Film”を見て、思いついた問いをもとに p4c が行われた。選ばれた問いは、「何もないようなところの出身で、それでもすごい人になれるだろうか」。問いを挙げた生徒は、自分達の境遇と映画の状況を重ね合わせ、疑問に思ったのだという。この日は、この問いのおかげで、普段は落ち着いた生徒も議論に真剣に参加しているのが大変印象的だった。

## 4 カイルア高校

カイルア高校は、オアフ島東部ウィンドワード地区に位置しており、ハワイの高校としては p4c Hawai'i が定着した初の公立学校である。ワイマナロ小・中学校から進学してくる生徒も少なくない。2000年代初頭にアンバー氏が p4c を行ったのをきっかけに、チャド・ミラー氏も英語の授業で取り入れ、英語科教員から徐々に p4c が普及していった。こうして学校の文化それ自体に変容が起きはじめ、生徒たち自身が教師に p4c を教えるという現象すら起きたといい、2010年代初頭には他教科にも浸透していく。現在では、“PhiloSURFERS”とあって、カイルア高校で p4c に親しむ生徒たちが、他の学校にも「移り渡って」p4c のサポートをする活動が行われるまでに至っている。この活動に参加すると

単位も付与されるといい、生徒のモチベーションや継続性にも十分配慮がなされている。

各教科での取り組みも非常に多様である。英語の授業では、かつて実際に起こった「セイラム魔女裁判」（魔女狩り）をテーマにした著作“The Crucible”を読んだ後、p4cを行う。この授業では、登場人物の心理分析を行い、自己流でよいので最終的に「心理学理論」を打ち立てるためのエッセイを書き上げるという目標がある。この過程で、本を読んで思いついた問いを挙げて、グループに分かれて対話が行われた。筆者のグループでは、「人はなぜ圧力や恐怖に屈してしまうのか」が議論され、各自が自分の考えと理論の洗練にいそしんだ。興味深いのは、単に哲学探究をするだけでなく、議論の過程で他の歴史的事件との関連性を探ること、問い（つまり仮説）を修正し続けること、そして、さらに浮かんだ疑問があれば書き留めておくことが教師（博士号を持つ）によって指示されたことだった。

そのほかにも、ランゲージ・アーツという言語科目やジャパニーズ・スタディーズといった日本文化の授業でも p4c が行われており、「なぜ人にその人が無知であることを伝えると、人は（特に子どもは）怒られたり、罰せられるのか」、「環境を破壊しなければ生きられないのであれば、むしろ人間の数を減らすべきではないのか」という挑戦的な問いが議論されている。いずれの授業においても、しっかりと p4c の目的やルールが冒頭で確認されていただけでなく、PhiloSURFERS の学校らしく、進行役を生徒自身が務めることもあるなど、極めて先進的である。アイス・ブレイクも、「自分自身を表す色を一つ挙げて、その理由も教えてください」といったクリエイティブなものが多いのが印象的だった。

それから、定型の p4c 授業シートが活用されており、あなた自身の問い→クラスで選ばれた問い→対話する前の考え→対話の内容や友達の発言のメモ→対話後のリフレクション：自分の考えや学んだこと、もやもやしていること、どのようにして自分の考えが変わったのか等を順に記載できるようになっていて、各人の思考の轍・変容が確認できる。

そして、なんとといっても「エスニック・スタディーズ」の授業は圧巻である。この教科は、本邦では聞きなれない教科ないし学問領域だが、様々な人種・文化の多様性や歴史、それに対する理解を深めるとともに、社会正義を促進するための科目として p4c とセットで設定されている。アンバー氏が 2005 年に、全学年混合の任意的な放課後活動として試験的に始めたのを皮切りとして、翌年には早くも選択科目に昇格、また翌々年には校長の判断で、すべての一年生の必修科目として 4 人の教員によって担われるまでになった。

まさに「人種のるつぼ」であるハワイならでは、という感じもするのだが、他方で 2000 年前後には、カイルア高校キャンパス内外で暴力を目の当たりにする教職員や生徒も多く、こうした背景もあって、ハワイ大学内に設置された「アジア・太平洋地域青年暴力防止センター」の協力で、このプログラムがはじめられたという経緯もまた見落とせないだろう。

人種、暴力、ドラッグ、貧困、ホームレスといったハワイの抱える深刻な社会的問題に対して、他者に対する共感や尊敬、想像力、他文化に対する歴史や知識を身に着けることを通じた偏見の撲滅を目的とする本教科では、ハワイを舞台にした同様の問題を表象する小説“The Tattoo”を読んだり、「なぜ人は感情を伝え合うのが難しいのか」、「ドラッグを合法化すべきか」といったテーマで、p4c も日々行われている。

生徒の反応は、実にまちまちであり、真剣に参加する生徒もいれば、終始遊んでいる生徒もいる。内容的には極めて過激で具体的なテーマを扱うため、日本の学校ではおそらくできない類の授業だが、担当する教師の一人によれば、やはり保護者からクレームが入る

こともしばしばだという。それでもシラバスの表現を工夫したり、生徒たちが安心を感じているかなどに終始気を配ることで、どうにか続けているという言葉は忘れられない。

## 5 ハナハウオリ小学校

最後に、ハナハウオリ小学校の取り組みを紹介したい。ホノルル中心部からのアクセスに恵まれたこの学校は、タンタラスの丘という絶景スポットの麓にあり、ハワイの中でもやや所得の高い層が通う、進歩主義教育・少人数制の私立小学校である。

p4c が行われ始めたの自体は近年のことで、そういう意味での歴史は浅いが、学校自体は 1918 年の設立と、その歴史は非常に深い。フランシス・パーカーとジョン・デューイの強い影響を受けたクック夫妻によって設立されて以来、デューイの標語、“Learning by Doing (することによって学ぶ)”を聞かない日はないというくらいにプラクティカルで、“Joyous Work (喜びに満ちたワーク：Hanahau’oli の意味)”の学校である。また保護者や卒業生との関係性が非常に密で、イベントの有無にかかわらずこうした人々が校内に出入りしており、学校全体が一つの共同体、一つの“Ohana”=家族を形成している。

その実は決して理念や言葉の域にとどまらない。生徒は実に生き生きとしており、傍から見れば休み時間と授業中を区別できないことがあるほどである。同じ授業中に、生徒は地べたに寝そべってお菓子を頬張りながら教師の話聞き、パソコンを操作したり、中庭で絵をかいたりしている。p4c も決して少なくない頻度で導入されている。この学校での p4c は、私立学校において p4c がどのように機能するかを知る試金石的な試みでもある。

まず、英語と文学の授業では、小説や新聞記事を読み、p4c が行われている。Po’e Ka’ahale (4, 5 年生) 教室には、プレーン・バニラの心構えや、建設的なフィードバックの仕方といったポスターが無数に張られている。問いは、小説の登場人物の心情理解であったり、新聞記事であれば、「ホームレスであることは本当に幸せでないのか」といったテーマで行われる。また、日本的にいう「帰りの会」で、一日をふりかえる際にも p4c が行われる。導入されてまだ数年だという p4c は、徐々に学校全体に浸透していく過渡期にあるようだ。

それから、毎週金曜日の放課後活動としても p4c が行われている。主にプレーン・バニラのスタイルで行われ、全学年混合の固定メンバーが、毎回自分の「ワンダー」を持ち寄り一時間ほど対話するのが常になっている。週一回という頻度で参加し続け、なおも自分の意志で来ているメンバーだけあって、彼らの哲学的な思考力は類まれなものである。対話の内容までは紹介する余裕がないので、問いを挙げるにとどめるが、「何もないってどういうことか」、「なぜ私たちはこの世界に存在しているのか」、「知識とは何なのか、どのようにそれを定義したらいいのか」、「私たちって何のことか」、「もし動物が人間を支配して人間をペットにするような世界になったら？」といった問いが日々話されている。

進行役は、ハワイ大学の大学院生マーティン・ハミルトン氏が担当しており、学部は哲学科というバックグラウンドを持つ彼による、ツール・キットを用いた巧みな進行方法もまた、子どもの哲学的な思考を促進する重要な部分であることは特筆すべき点だろう。

## 6 おわりに

最後に、簡単な所感を付け足して、本稿を締めくくりたい。まず全体的な印象として、どの学校も数年から数十年という時間をかけて、学校に p4c の基盤や文化を形成し、学校全体でそれに取り組んでいる。そこでは、本邦ではほとんど見られない「校内哲学者 (Philosopher in Residence)」の長期的な協力も不可欠である。その結果、ハワイ大学のメンバーが抜けても、複数の教師が実践を続けられ、その影響は尽きることがない。また、校長ら管理職との関係も非常に深く、彼らの好意的な理解に実践が強く支えられている。

それから、議論自体が哲学的になるかどうかよりも、コミュニティや環境面に主眼が置かれている。探究のための環境や雰囲気がいしっかりと確保されているかどうか、この点が何よりも優先的に査定され、教師は常にそのための細心の注意を払っている。この際、うまくいっているクラスや教師ほど、導入部分やツール・キットの利用を大変器用にこなしており、結果的に、議論を哲学的にすることにも成功しているという印象がある。

筆者の滞在期間はまだ残っているものの、その半分が経過した現時点での中間的な報告をまとめてみることは、現時点での研究成果の言語化や滞在終了時の見解との比較という点でも有用だろうと判断し、本研究報告は書かれている。今回は事例と実践を紹介するだけでもそれなりの分量になったため、滞在終了時にあらためて現時点との比較や総括的考察の必要性がある場合には、理論的なものであれば論文の形式で、そうでなければ次号の研究報告に掲載することを試みたい。

\* 本研究は、日本学術振興会・松下幸之助記念志財団研究助成の成果の一部です。